

自由学園・明日館

東京―飯能 つながる文化。

「自由学園」は、羽仁吉・もと子夫妻によつて1921年(大正10年)に創立された学校。2人は家庭の合理化・近代化を訴えた「家庭之友」(今日の「婦人友」)を発刊したジャーナリストであり、キリスト教精神にもとづく理想の学校づくりをめざした。現在も、東久留米市に広大な敷地を持ち、幼稚園から大学部までの一貫教育で約1000人が学ぶ。「生活即教育」を旨とする教育理念はユニーク。多くの生徒は学園内の寮で生活し、キャンパスの維持管理のほか、稲作、女子部生徒による農芸、男子部生徒による酪農と、それによつて得た給食調理も生徒自身が行

っている。

フランク・ロイド・ライト・遠藤新の共同設計だという「自由学園・明日館」を訪れた。飯能からだ和西武線でひとつ走り、池袋駅から歩いて10分ほどの場所にある。派手な建築を目にすることが多い現在にあつて、地を這うようなその建物、それほど目立つ存在ではない。ところが、実際に身を置いてみると、実に心地いい。押しつけがましさがなく快適さがある。遠藤現氏はヒューマンスケールという言葉でそれを表現していたが、どの部位に居てもそのサイズやデザインに必然性があり無駄というものがない。



土鳩鳴く天覧山の麓にも

埋もれし昭和の建築光る

事務棟の通し柱は市民らと

果てなき広さの空への叫び

この短歌は、平成23年8月29日に行われた「お掃除会」の際に、浅見美紗子氏(飯能歌人会副会長)が詠んだものです。

●編集後記 「情緒的感想」

旧平岡レース事務所跡に1本残されたシダレザクラは、日本三大桜である「三春滝桜」(国指定の天然記念物・樹齢1000年以上)の子ともであるという。一時は切られる予定であつたが、貴重な桜であることが判明し、生かされること。跡地には新しい図書館が建つ予定であるが、この桜には、飯能の二時代を作つた繊維産業の生き証人として、未来にわたつて咲き続けてほしい。

Vol.01

October 2011

飯能情緒

「まちなか」に残る、
繁栄の痕跡。

揺れ動く、まちの景観。

●寄稿 宮尾節子氏

「こころの建築・遠藤新作・旧平岡レース事務所棟」

●寄稿 浅野正敏氏

「飯能に残る建築遺産をまちづくりに」

飯能情緒

飯能文化の良さをワンテーマで伝える冊子。サポーターからの資金提供により取材・制作を行っています。ご意見・ご感想または制作依頼は、下記までご連絡ください。

■発行者

取材・随筆 石井 茂 Tel: 042-973-4004 mail:ishii-design.info
グラフィックデザイン 黒田 靖 Tel: 042-973-0272 iy9y-krd@asahi-net.or.jp

取材・制作にあたりまして、大変多くの方にご協力いただきました。
この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

揺れ動く、 まちの景観。

町中に残る古い建物。
町から近い里山の風景。

飯能の魅力のひとつで語ることはむずかしい。
飯能の人々は目立つことを好まないし、
かといって、流されるわけでもない。
だから、町の風景もありのままの姿にある。
市街化とともに失ったもの・手に入れたもの。
その両方が現在の飯能の姿そのものであり、
ここに住む人々の選択でもあった。



繁栄の痕跡が、
まちのあちこちに散らばっている。

飯能の市街地はそれほど広いわけではない。駅周辺に店舗が密集しているエリアがあるだけで、駅から離れるとすぐに農山村風景と緑濃い山々が続いている。飯能の人々は、この小さな市街地を親しみを込めて「まちなか」と呼ぶ。

このまちの特徴をあえて言うのであれば、「気取らないまち」ではないだろうか。駅前に繁華街があり、そこから少し歩いたところに昔栄えたであろう街並みと地元の人で支えている商店街がある。通り過ぎるだけでは目立つたものを見つけられず、どこにでもある街並みというふうにも見えなくはない。ここに暮らす人々は、自分たちの生活や商売に必要なものをつくり、残してきただけなのだ。

それでも「まちなか」には、店蔵などの古い建物が残っている。地理的に見ると、飯能は山と町をつなぐちょうど要の位置にあるので、山の物資を町へ、町の商品を山へ売り買いするのに都合がよく、相当な賑わい

園」の設計を手掛けた建築家として広く知られる。

著名な建築家の設計と聞いてまず関心を持ったのは、繊維産業で栄えた飯能の有力企業であった旧平岡レースと建築家・遠藤新の結び付きである。旧平岡レース初代表である平岡良蔵氏は、飯能市（当時は飯能町）の首長を務めたほか、国会議員にもなっている方。地域への影響力は甚大であつたろうし、国政に参加している方であるわけだから、当時の文化風俗にも精通していたに違いない。事業の方も、戦後の需要拡大期に向けて刺繍レースを手掛



店蔵 絹甚

れに事情があるということだろう。
市においても、古くて価値ある建築物を残し、活用するための取り組みが行われている。「飯能大通り商店街」にある店蔵「絹甚」は、明治30年代後半に建てられたもので、市の指定文化財になっている。店蔵とは単なる倉庫としての蔵ではなく、店舗を蔵造りとしているところに特徴があり、装飾的にも工夫が施されている。蔵の街として名高い「川越」にある蔵も、ほとんどがこの店蔵である。

ただの事務所ではない。

を見せていた。今も、その繁栄の痕跡が町のあちこちに散らばっているのである。店蔵を改造したカフェやそば店、洋館装飾の医院やギャラリー、古い木造の料亭や食堂など、代々受け継がれた建物を今に活かしながら使っているという個人は多い。ただ商売にうまく活用できている場合はいが、一方で受け継がれてきたものをたやすく壊してしまうわけにもいかず、苦勞している方がいることも見逃してはいけない。大事に思う気持ちは同じでも、それぞ

さて、この度のテーマはこの「絹甚」ではなく、「旧平岡レース事務所棟」である。当建築物は、昭和25年（1950年）に遠藤新（えんどうあらた）の設計により建てられた。遠藤新は近代建築の三大巨匠の一人とされるフランク・ロイド・ライトの直弟子で、ライトとともに「帝国ホテル」や「自由学



左から、ジョン・ロイド・ライト（フランク・ロイド・ライトの長男）、遠藤新、フランク・ロイド・ライト、林愛作（帝国ホテル総支配人）
写真提供：遠藤現建築創作所

け、景気が上向こうとしていた。先見の明があったのである。

その旧平岡レースがどのような経緯において遠藤新とつながり、本社事務所の建築設計を依頼するに至ったのか。その答えは、自由学園を通してのつながりということになる。旧平岡レースのご令嬢は、当時、日本の教育に新風を吹き込もうとしていた自由学園に学んでいた。平岡家は自由学園を介して遠藤新の建築に触れていたのである。

ところで、遠藤新の建築ポリシーは「有機的建築」と言われている。これは彼の師であるフランク・ロイド・ライトが提唱した考え方で、敷地、光の向き、風の方角、地域の風土・風習の周辺環境と調和する建築である。付け加えるなら、使用する人間を、人間の生活を中心に置いた建築ということになる。こうした考え方は、自然から学び、「生活即教育」を基本理念としている自由学園とめざす方向が極めて近いのでは



旧平岡レース事務所・室内

ないか。旧平岡レースによる遠藤新への設計デザインの依頼は、単なる貴族趣味というものではなく、遠藤新の建築を理解し、全面的な共感のもとに指名したことが想像される。

この土地に求められる建築。

次なる関心は、建築家・遠藤新が飯能山手町の環境をどう感じたかである。「旧平岡レース事務所棟」が建てられたのは、昭和25年。当時その一帯は、武蔵野の名残りを漂わせる風光明媚な地であつたろうし、天覧山や飯能河原を中心とする遊覧地の一角として整備されていた。こうした環境を有する敷地に事務所棟の建築設計を依頼された遠藤新は、いかなる発想と段取りで仕事に取り組んだのか。使用目的は、繊維会社の本社・事務所。この場合、必要以上に飾らないことが彼のいう正しい建築であるわけで、事務所として機能的かつ心地よく働ける建物とすることに徹した。プロとして淡々と作業を進めたのではないか、と思う。



天覧山駅付近から西側(昭和39年)

天覧山駅／天覧山への観光駅として昭和6年に開業。戦争末期に休止され、戦後復活の話も出たものの、結局実現することなく昭和29年に廃駅となった。



駅跡付近に残る桜の木

終戦から5年が過ぎていた昭和25年の飯能は、文化的な動きが活発化していた。飯能「文化新聞」が創刊されたのもまさにこの年であるし、詩人・蔵原伸二郎のもとに集まった有志によって「飯能文化(のちの「武蔵文化」)」「雑草」などの雑誌・同人誌が活発に出されていたのも、大雑把に言えばこの頃であつた。オリジナルな地域文化が生まれようとしていた空気を遠藤新が感じ取り、彼の創作に何らかの影響を与えていたとすれば、わくわくせずにはいられない。

山手町の敷地に話を戻せば、西武鉄道「天覧山駅」から天覧山へ向かう道の真つただ中にそれはあつたようだ。かの道には桜並木が植えられ、都会から電車で揺られてやってくる遊覧客や遠足の児童らを歓迎していた。長々と続く桜並木があり、天覧山、多峯主山といった緑濃い山々が背景をつくっていた。なつかしくのんびりとしているながら、どこともなく風雅な雰囲気

漂わせる：小さな山に囲まれた箱庭のような景色を、遠藤新はどのような思いで眺めたのだろう。取材を進めるうちに、次のような話を拾うことができた。国土荒廃により資材不足にあつたその頃、自由学園は「自分たちで苗木を植えて、30年先にはその木を使ってこのキャンパスに新しい校舎を建てよう」という創立者の呼びかけにより、名栗村(飯能市)で植林活動をはじめていた。自由学園からそのことを知らされていた遠藤新は、「旧平岡レース事務所棟」に西川材の活用を志向することで、当地域に対する期待と好意を表現したに違いないというものだ。

※昭和25年にはじまった自由学園による名栗の山への植林活動は、現在も続けられている。

どう残すかではなく、どう活かすか。

昭和25年は、忘れ去られた過去ではない。現在につながる親しみのある昔である。山

遠藤新と飯能



旧平岡レース事務所棟の建築に際し、遠藤新がどのような態度で臨んだのか。そのあたりが気になって仕方ない。そこで、その手掛かりを得るために、遠藤新の孫にあたる方で、現在東京都新宿区にて設計事務所を主宰する遠藤現(えんどうげん)氏に話を伺いに行った。遠藤新とは同時代に生きているわけではないため、「人づてである」という前置きが付いての

話ではあったが、貴重な内容であった。氏によると、その頃、体調を崩していた遠藤新は、息子の楽(らく)に実務を任せていたようである。とはいえ、「遠藤新建築創作所」の名で請け負っていた仕事であるから、基本的な構想は遠藤新によるものに違いないということであった。そして、現場にも何度か足を運び、指示を出していたものと思われる。

また、遠藤新は施工に携わった若き日の吉澤良男氏(株吉澤建設工業・故人)とも会っている。以下は、遠藤新の研究者である井上祐一氏による吉澤氏へのインタビューの抜粋&要約。

吉澤：遠藤先生を知ったのは、茶のスーツを着て玄関の所で話をしていたので、会社の人なのかなと思って聞いた時に、「遠藤さんっていう設計の人だよ」と言われたのを記憶しています。

井上：それは遠藤さんに間違いないですね。

吉澤：私が見た感じでは、60歳くらいの感じという記憶があります。黒縁の眼鏡でした。当時、私も偉い先生ということは、全く知らなかったのですが、ここの社長が国会議員までやった偉い先生で、遠藤先生に頼んだのかなあというように思っていました。

今となっては、飯能を訪れた当時の遠藤新の様子を知るすべは多くない。また、心臓を患っていたことから、訪れた回数も多くはなかったようである。しかし、「旧平岡レース事務所棟」の中に入ってみると、随所に遠藤新の建築思想がくっきりと息づいているのがわかる。多くを語らない建築家は、建築作品を通してモノを語り、足跡を残したのである。



写真提供：遠藤現建築創作所

遠藤現氏

手町辺りの風景は今も同じような印象を保っているし、郷土に根ざした飯能文化は色褪せることなくこの地に受け継がれている。焼け野原からの復興を遂げ、日本人が前向きに動き出そうとしていたこの時期、飯能の戦後も、ここからはじまっているのである。

「旧平岡レース事務所棟」が建てられた翌年に遠藤新はこの世を去り、当建築は彼にとつての遺作となった。今は使われていない(解体されることになった)この建物をどうすべきか、設計者本人に聞いてみたい気がする。

いかに建築が許されるか
いかに生活が許されるか
そしていかに生活が展(の)びられるか
それをその自然から学ぶ

と遠藤新はいう。この言葉から、まず自然ありきで、建築はその空間を仮に使わせてもらっているという態度であることがわかる。こうした考え方は、もともと日本人が持っているものであろう。日本人は古来

より自然を崇拝し、感謝を込めて「自然から学ぶ」生き方をしてきた。もともと日本人には、「有機的建築」を理解できる土壌がある。

残された建造物をただのお飾りにするのであれば、「必要がない、解体してしまえ」ということになるのかもしれない。今問われているのは、「この建物を人間の生活にどう活かすか」ではないだろうか。

飯能の魅力とは何か、改めて考えてみる。都心から近くて自然が豊かなところ：これには誰も異存はないし、今も昔も変わらない事実である。しかし、

これだけでは言い切れてはいない。捉えどころがむずかしい事柄であるが、そこに町の景観や人々の生活に染み込んでいる文化を加えな



旧平岡レース事務所棟

ければならない。川越や秩父、青梅などでは見つけることができるのに、飯能のまちにはあるもの。その土地の住民が何となく感じている小さな差異を見つけて、注意深く保ち、楽しいアイデアを加えながら育てていくこそが、これからの地域の活性化につながるのだと思う。

文／石井茂

こころの建築

遠藤新作・旧平岡レース事務所棟



まづ地所を見る
地所が建築を教えて呉れる
いかに建築が許されるか
いかに生活が許されるか
そしていかに生活が展(の)びられるか
其をその自然からも学ぶ
其所に土も石も草も木もある
そこから建築がのびて来る。
其の逆の方から云う、自然から材料を貰う、
自然に合わせて物をつくる。
そしてその作品をひっさげて人間諸共、
母なるまたは父なる
自然に帰る。

まるで詩のように美しいこの一文は、遠藤新がライト氏の弟子から建築家として一本立ちして、二年三月後に彼の建築物と共に『婦人之友』に寄せた「はしがき」の一部です。
世界三大建築家の一人であるフランク・ロイド・ライト氏の直弟子である、遠藤新氏の遺作にあたる貴重な建物が、わが町飯能に存在するとわたしが知ったのは、惜しくも、保存から解体に転じたと発表された後のことでした。

たまたまお手伝いすることになった、去る四月十四日の「旧平岡レース事務所棟の見学撮影会」にはスリッパの数足りず、急ぎよ「よく靴を拭いておありがとうございます！」とお願いせざるを得ない

背後に望む田やかな天覧山の頂きと事務所棟の方形の屋根のラインがぴつたりと重なる心憎いまでの計らい。来客者は従業員の働く事務所内を横切ることなく周りに巡らされた廊下を通じて応接間へと誘導されるその心配り。玄関階段の踏み板幅と蹴込み高の踊り場からの呼吸の転調。二階会議室の四方からの風通りに対応して角度が自在に開閉する小窓。二部屋を二つに使用する時、椅子に座る者と畳に座す者との目線を揃えるため高くあげた和室の床。伸ばすべき直線はすつと健やかに伸ばし、触れる

ほどたくさん参加者が訪れました。遠くは京都から新幹線で駆けつけたという古建築の著名な研究者もおられ、見学の間じゅう「これは、凄い」「うむ、参りました」と建物の資材や、その意匠をこまかく点検しては、ひとつひとつに感嘆の声をあげておられました。その声に教わるようにして、改めて建築家・遠藤新の仕事の確かさや存在の偉大さを感じ知る一日となりました。
見学会は、まずは取り壊しの始まった食堂棟から、遠藤新のお孫さんである遠藤現さんによる説明が物静かな語り口で始まり、丁度しがされたばかりの天井やはずされた壁板から、遠藤新の講堂建築の特長である「三枚おろし（魚のおろし方を模した）」の構造等をよく見ることができました。

遠藤新がフランク・ロイド・ライトから受け継いだ建築精神『有機的建築』とは、周囲の環境との関連性から展開する生活と密着した、社会全体で考案される建築空間とのこと。（『統一と全』つまり、自然と人と建築が一つの「メリー・ゴーランドのように」）（とわたしは思い浮かべました）いきいきと楽しく結ばれて日々を暮らし、歳月を共にし、お互いの存在を活かし助け合い、全てが大きな「生命体」となっていく姿だ。その「美しい理念」は、二見地味にみえる旧平岡レース事務所棟でも、控えめながらも随所に余すところなく活かされていました。



天覧山に寄り添うように建つ平岡レース事務所



角は丁寧（かぶらづか）

角は丁寧に面取りが施され目に温かく手に優しい。二度目には見逃し二度目に気付く各所の控えめで手を抜かない意匠——あげだすときりがないほど、目をこらせば建物の隅々に配された遠藤建築の「宝」が見つかる。



大黒柱

先ほど「メリー・ゴーランド」と例えたけれど、その極めつけが、じつはもう一つある。二階から二階へと貫く大黒柱の先で、傘の骨のように開いて、方形の屋根を支える

『蕪束（かぶらづか）』という独特な構造だ。

昔から、日本の民家には囲炉裏があり、火を囲むという形で人びとが育んだ、日本の文化には暖かい（中心があるように思える。この蕪束を見上げていると、その中心の大黒柱の周りに忙しく立ち働く、かつての平岡レースの老若男女の姿が見えてくるような気がする。そして蕪束の周りで働く人びとと共に、活気ある飯能のひと時代を生き抜いた平岡レース事務所棟の建物全体が、遊園地のメリーゴーランドのように脳裏に浮かびあがってきて、楽しげに廻り始めるのだった。』

ここは迎賓館でもなんでもない。平岡レース工場の事務所棟、食堂である。レース工場で働く普通の人びとが細ごまこと立ち働き、時



寄稿

飯能に残る 建築遺産を まちづくり

画：児嶋邦三氏



旧平岡レース事務所棟が、遠藤新の設計の建築であると私が知ったのはいつ頃だったろうか。最初の印象は、特に心を打つような強い印象を与えられたという記憶が無い。

平成21年11月の「飯能の建築遺産を見つめ直す」講演会で事務局として関わり、以後、有機的建築といわれるフランク・ロイド・ライト直伝の空間構成に徐々に引き込まれていった。

その建築は、いたってシンプルである。遠藤が手がけた多くの建築作品にみられる装飾はない。その理由としては、戦後間もない時期で建築資材もそう容易くは手に入られなかったであろうし、事務所建築という用途上のことと考えられる。しかし、そうした条件の中で、かえってこの建築は精神性のみが形となつて現れている。遠藤新建築研究で知られる南迫哲也氏（工学院大学名誉教授）の言葉を借りれば「繊維工業を通して平岡レース、並びにま

にほつとくつろぐ場所である。（わたしの仕事の場所ではない。あなたがたの仕事の場所である）：わたしにはそういう新氏の声が聞こえるように思えた。

見

学会に出かけ、最後のお掃除会に出かけと、足を運び、通えば通うほど居れば居るほど、不思議に心が安らぎ、居心地がよくなる建物だった。だが、現代のアーティストの作品然とした建築物のように、奇抜に目を引くものはない。その地味さが仇となり、今回の解体という結末を迎えたのかもしれない。

しかし、その「普通」で「地味な懐」の何と居心地の良い建物だろう。それは、飯能という町の居心地であり、飯能人という人柄の憩い心地を、もしかしたら遠藤新は一瞬にして見抜き読み解き、建物に顕現させてしまったのではないだろうか…。

かつて、この工場長だった方のお話を聞かせてもらう機会があった。いろいろと工場の栄枯盛衰の貴重なお話を聞かせてもらった帰り際に、そつとわたしはお尋ねしてみた。「ところで、建物の居心地はどうでしたか？」と。すると「年配の元工場長さんはしばし考えてから、ぼつりとひと言「あったかった」と、答えられた。それから、につこり笑って「なぜか、気持ち温かくなる建物だったなあ」と。わたしは、我が意を得たり！とうれしかった。

その言葉を得て、遠藤新の有機的建築とは「こころの建築」だと確信した。壊されてしまう「こころ」を忘れないようにしたい。

文／詩人・大工の娘 宮尾節子

ちの発展を願う想いを建物の中心に置く大黒柱に込め、それは2階屋根裏小屋組の『かぶら束（傘の骨のような構造）を支えるその芯となって天空へと向かっている」といったふうである。

それでも、二つとつを見れば階段や天井、建具などに意匠が表出しているが、華飾は押さえられている。動線（人の動き）や天井の高さ、窓の高さなどの繊細な配慮により、住宅のような居心地の良い空間となつているのだ。

「飯能市内には、絹甚（明治37年）、飯能織物協同組合事務所（大正11年）そして旧平岡レース事務所（昭和25年）等々、飯能における繊維産業の痕跡が建築という形として残っています。」と言いつつ続けたが、その大きな一端が消えてしまった。

飯能の文化遺産としてのこうした古建築（明治・大正・昭和の時代に建った建物）は、現在と繋がることから出来る歴史の生き証人として重要で、触れる事が出来る記憶装置と言える。そうしたものは安易に消し去るのではなく、大切に引き継いでいくべきものと考えている。

旧平岡レース事務所棟について現在地への保存と活用を訴え続けてきたが、飯能市は、残念ながら手壊し解体保存という望むべくもない結論を出した。この場に至ってはすべて消え失せるというよりは、再生可能な部材保存ということに「筋の希望を託したいと思う。旧平岡レース事務所再生の運動の意義は、「歴史や文化を大切にしたいまちづくりを進める」という飯能市民の総意が形になるかどうかの二里塚かも知れない。

文／建築家 浅野正敏